

〈研究ノート〉

色彩の体験的学習で見方・考え方を豊かに養う学びをさぐる —色彩に関する体験的学びの方法と時期について—

金子 美里^{*1}

Key Words：図画工作科 色彩 見方・考え方 感知 色ジャンケン

1 はじめに

学校教育で学んだことは、実生活に生かされることで実感的な理解を深めることができる。図画工作科として教科内にとどまらず、そこでの見方・考え方を生活や社会に豊かに関わる態度として育成するにはどのような方法があるか。

本研究では、色彩¹⁾に関する体験的学びがその具体的な一手となりうるのではないかとの推測を立て、実践を交え考察を行った。色彩に視点を置いた学習では、自分なりに根拠をもって色使いをすることや、他者と感覚を共有すること、新しい価値を見出すことなどができる。そして、その見方・考え方を実生活に関連付けて考えることができる点で学習効果が期待される。

また、色彩の特徴を理解することが望まれる時期に関し、実践を通して考察する。

2 調査・実践

(1) 学生への「色彩に関して思うこと」の事前調査²⁾

調査の結果、学生から次の3つのタイプ(積極的・消極的・意味重視)の意見が出された。

〔色彩に積極的に関わるタイプ〕

- ・「色で物を選びます。」
- ・「服を選ぶときは明と暗のバランスを考えます。」
- ・「服はモノトーンで、靴に色身を入れるのが好き。」〔色彩に消極的に関わるタイプ〕
- ・「どの色と組み合わせれば相性が良いか分からない。」
- ・「人によって色の捉え方が違う時、どう捉えるか。」

・「あまり色を意識していない。」

〔価値づけられた色の見方(意味・流行)を優先するタイプ〕

- ・「好きなアイドルのイメージ色にこだわる。」
- ・「黄色を見ると立ち止まってしまう。」

【事前調査からの課題の抽出】

上記の事前調査より、学生の色使いに関する視点(バランス、雰囲気、相性、意味(流行))を抽出し、それらを手掛かりに4観点を指定した。調査を行った学生が色使いへの達成感を得るにはこの4観点を関連させて総合的に考えることが必要であることを示した上で、以下の実践Ⅰ～Ⅲを行った。

(2) 学生の課題意識に基づいた色彩表現の実践

次の実践Ⅰ、Ⅱでは「色に豊かに出会う」をテーマにし、実践Ⅲは、「実生活における色彩を味わう」をテーマとした。Ⅰ～Ⅲの実践を通して、学生が色彩を多角的に捉えるとともに、自分なりの根拠をもって見方・考え方を探求する機会になることを目指した。

実践Ⅰ テーマ「色に豊かに出会う」

題材名「手作り色図鑑」

【題材の目的】

- ・身近なものから絵の具を作り出すことで、改めて色に着目すること
- ・色を比較することで多様性を感じる
- ・色を秩序づけて見ること

【実践内容と過程】

以下の過程における色の見方・考え方を〔 〕で示している。

1. 身近な材料(葉っぱ、花、ジュース、わさび、など)をすり鉢で潰し、糊を混ぜて手作

^{*1} Misato KANEKO
関西福祉大学

- り絵の具を作る。〔色を予想する〕
2. 作った色を図鑑用シートに塗り、その色で他者と「色ジャンケン」³⁾をする。〔色を配列する、多面的に見る、理由付ける〕
 3. 色に名前を付ける。〔色を関連付ける〕
 4. 学生が図鑑用シートを持ち寄って色の系統（赤・黄・青・緑・茶・灰色・紫）で班に分かれる。〔色を分類する〕
 5. 班ごとに図鑑用シートのページの配列を考える。（並べ方の根拠を話し合う）〔色を配列する、色を順序づける、比較する、理由付ける〕
 6. 配列の根拠を発表し、視点の共有をする。〔多面的に見る〕
 7. 作った色を生かした絵を描き、色に価値を見出す。〔色を具体化する〕
 8. 「手作り色図鑑」を小学校の授業で実施すると仮定し、1～7の過程にある「児童にとっての学び」について考える。

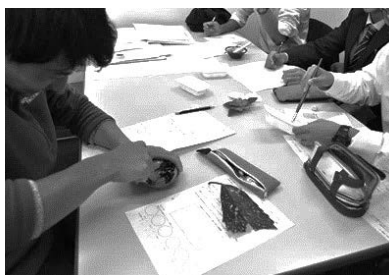


写真1. 色作りの様子

【結果と考察】

過程 1 では、学生は材料をすり潰す工程で、出る色の予想を立てた。しかし、実際に出る色は予想とは違い、薄かったり全く違う色味であったりした。そこでさらに色への注目が高まった。

過程 2 では、出来た色を見せ合い、ペアで「色ジャンケン」をさせた。色を見比べさせ、「明るいから勝ち」や「どちらも白っぽいからあいこ」など、勝負の理由を伝え合う。このことは、遊びの中で楽しく色の見方・考え方を探求し、視点を他者と共有する機会となった。

過程 3 では、作った色からイメージすることを言葉にしていた。

過程 4 では、作った色は薄いため、じっくりと色味を判断する機会となった。

過程 5 では、同じ色味の中でさらにどのような視点を持つかの話し合いとなった。見比べたり、並べ替えたりする様子があった。

過程 6 では、各色の班で「明るい順」「濃い順」

「色味がはっきりしている順」などの視点が挙げられ秩序づけていた。

過程 7 では、もとの材料の姿とは別の絵を描き塗ることで、作った色を活用した。

過程 8 では、学生はこの活動が児童にとって次のような学びになるのではないかと推測した。

「いろいろな色と出会う」

「比較して見比べる」

「自分の作った色と向き合う」

「色への愛着を持つ」

「多くのものを一つのまとまりとして考える力」

「色で他者とつながる」

「色同士の関連付けをする」

「少しの違いに気付けるようになる」

本実践では、各工程において見方・考え方を意識させることで、学生は色を多角的な視点で捉えるようになった。

実践Ⅱテーマ「色に豊かに出会う」

題材名「色の組み合わせの効果を味わう」

【題材の目的】

- ・学生の色彩に関する課題意識を共有しあうこと
- ・色同士の効果的な組み合わせができるようになること

【実践内容と過程】

実践Ⅱでは、先に挙げた 4 観点について、見方・考えを整理するための実践を行った。

〈色の相性〉

色同士の相性が合うとは具体的にどうか。ここでは、異なる 2 色（例えば緑と紫）を並べその相性を探った。方法としては、それぞれの色を三原色に分解し（例：緑＝青と黄、紫＝青と赤）考えることで、互いに共通の色（青）が含まれていることに視点を置き、それが相性につながっていることを説明した。同様の実践を明清色・暗青色・濁色についても行い、色の種類を増やした上で相性の合う色を見つけ、その根拠を言葉にすることを行った。また、隣り合う 2 色に共通の色が含まれていない組み合わせ（例：紫と黄色）についても相性を探り、面積比（バランス）を変えることで感じ方（強弱や好みの印象）が変わることに気づかせた。

〈色の雰囲気〉

色で雰囲気を作り出す実践を行った。ここでは、1 色がもつ雰囲気と、組み合わせた 2 色による雰囲気の違いに注目させた。活動例として、赤のもつ雰囲気「強い、熱い、怖い、激しい」

などを想起させる。その赤の隣にピンクを組み合わせた時の赤の雰囲気の変化「かわいい、あたたかい」などを感じ取らせる。続いて、赤と黒の組み合わせによる赤の雰囲気の変化や、赤と緑の組み合わせ（補色）による赤の雰囲気の変化を感じ取らせる。

次に、4つのテーマを挙げ、それぞれのテーマが持つ雰囲気を色の組み合わせで表す実践を行った。テーマとして参考にしたのは4種類のアニメの画像である（写真2）。



写真2. 3人の配色の例

上から1行ごとに「戦隊もののアニメ」「冒険もののアニメ」「かわいらしいアニメ」「妖怪がメインのアニメ」のテーマを設定している。

各アニメの画像を見た後に、その印象を班員で話し合い、80色の色紙の中から4色を選び組み合わせる活動を行った。

班ごとに行った組み合わせを比較したところ、次のような傾向が見えた。

〈組み合わせにみる共通の傾向〉

「戦隊もののアニメ」：暗青色（＋赤、金）、

「冒険もののアニメ」：純色（＋黄土色）

「かわいらしいアニメ」：明清色（＋光）

「妖怪がメインのアニメ」：濁色（＋黄、黒）

学生は、各テーマの色彩の傾向を色立体の位置関係でとらえ、雰囲気を系統立てて見ることができていた。

さらに、発展学習として写真3「5色で語ってみよう」と投げかけ、テーマ「氷の世界」「楽しい色は悲しい色を訪ねる」を設定し、80色の色紙から5色を選び、その色で雰囲気を作る活動を行った。



写真3. 「5色で語ってみよう」の様子

「氷の世界」では、青系統の中にシルバーや

紺を入れた班もあり、イメージが深く伝わるものとなった。また、テーマ「楽しい色は悲しい色を訪ねる」では、暗青色や濁色が使われており、使う色に多様性が見られた。

〈色のバランス・意味〉

色を組み合わせる際の「バランス（面積比）」については、「意味（流行り）」と関連して扱うことで、身近な日常生活において考える活動とした。ファッションによる流行りのコーディネート例をいくつかのパターンで示し、流行りのコーディネートの印象は単に色だけでなく、そのバランス（面積比）が大きく関わっていると感じ取らせた。

実践Ⅲ「実生活における色彩を味わう」

題材名「身の回りの色彩を語ろう」

【題材の目的】

・実践ⅠⅡで学んだことを基に、色彩に対する見方・考え方の視点をもって説明することができるようになること

実践Ⅲでは、日常でよく見かけるものやパッケージの配色について自分なりの視点を持って語る実践を行った。

〈学生Aのコメント〉

「背景の赤色とお菓子の黒によって強く見せ目を引くようにしている。そこへ黒とは真逆の白を入れることによって、さらに明るくしている。アクセントとして赤の隣に色の近い茶（金）色を入れ大人っぽい雰囲気を出している。」

学生Aは、パッケージの色彩について、明暗、強調、対比、類似、雰囲気などに視点を置いて配色を語った。

〈学生Bのコメント〉

「冬の雰囲気として、あたたかいイメージと、ココア感を全体的に茶色でデザインしている。補色は使わず類似色の中で一番違いがあり、かつイメージをこわさない金と赤をアクセントにしている。」

学生Bは、色彩に温度感、味、強調、雰囲気に視点を置くなど、自分なりに配色の根拠を捉えた。

実践Ⅲから、学生は、日常で見かけるものやパッケージデザインに使われている色彩を、自分なりの根拠を持って捉え述べることができていた。

（3）学生の実践後の調査と考察

次に挙げる質問項目は、主に中学校美術で学ぶ項目である。これまでの実践Ⅰ～Ⅲを通し色彩に関する学びを整理した上で、次の項目に関

して、「いつ知ったか」、「いつ知りたかったか」の調査 4) ①～⑯を行った。(幼・小・中・高・大に○を記入する形式)

〈調査項目〉

- ①色には明るい色、暗い色がある
- ②色には鮮やかな色と、そうでない色がある
- ③色にはくすんだ鈍い色がある
- ④無限の色(色立体)は5色(赤・青・黄・白・黒)を基にできている
- ⑤赤・青・黄で色相環ができる
- ⑥色相環の色に白・黒・灰を混ぜることで色立体ができる
- ⑦色は1色でも雰囲気や感情をもっている
- ⑧色は、組み合わせによって変わって見える
- ⑨色は、組み合わせによって雰囲気を作ることができる
- ⑩色同士は、含まれる共通の色を基に調和する
- ⑪色同士は、共通の色をもたなくても、面積比によって調和する
- ⑫濁った色にも調和する色があり、1色では濁って見えても、他の色を組み合わせることで美しく感じられる
- ⑬社会性(時と場合)から色を考える際、主張したり、控えめにしたり、全体の一部になったりと、それは色選びの根拠となる
- ⑭補色は、身体的な現象で、眼が色相環の反対色を補おうとするでもある
- ⑮補色や類似色は、場に応じて意図的に使われることがある
- ⑯色は、単色や組み合わせで雰囲気が変わることから、探究すべき価値がある

表4. 調査結果人数 [n=74]

| | いつ知ったか(人数) | | | | | | いつ知りたかったか(人数) | | | | |
|----|------------|-----|-----|-----|-----|----|---------------|-----|-----|-----|----|
| | 幼 | 小 | 中 | 高 | 大 | | 幼 | 小 | 中 | 高 | 大 |
| ① | 45 | 26 | 3 | 0 | 0 | ① | 53 | 14 | 0 | 1 | 0 |
| ② | 13 | 45 | 13 | 2 | 0 | ② | 39 | 28 | 2 | 1 | 0 |
| ③ | 5 | 42 | 19 | 6 | 2 | ③ | 29 | 30 | 7 | 4 | 0 |
| ④ | 0 | 9 | 31 | 6 | 28 | ④ | 8 | 32 | 19 | 8 | 2 |
| ⑤ | 0 | 6 | 47 | 6 | 15 | ⑤ | 6 | 29 | 26 | 6 | 0 |
| ⑥ | 0 | 3 | 26 | 8 | 36 | ⑥ | 6 | 23 | 27 | 10 | 3 |
| ⑦ | 4 | 20 | 33 | 6 | 12 | ⑦ | 17 | 25 | 21 | 3 | 1 |
| ⑧ | 3 | 18 | 35 | 9 | 9 | ⑧ | 11 | 33 | 20 | 4 | 0 |
| ⑨ | 2 | 12 | 34 | 15 | 11 | ⑨ | 11 | 26 | 26 | 5 | 0 |
| ⑩ | 0 | 9 | 26 | 18 | 20 | ⑩ | 4 | 23 | 29 | 10 | 1 |
| ⑪ | 1 | 3 | 23 | 15 | 30 | ⑪ | 3 | 22 | 32 | 9 | 0 |
| ⑫ | 0 | 4 | 14 | 16 | 37 | ⑫ | 5 | 19 | 28 | 15 | 3 |
| ⑬ | 0 | 3 | 19 | 28 | 27 | ⑬ | 3 | 17 | 31 | 13 | 3 |
| ⑭ | 0 | 2 | 8 | 4 | 60 | ⑭ | 1 | 15 | 23 | 21 | 11 |
| ⑮ | 0 | 11 | 14 | 12 | 36 | ⑮ | 9 | 27 | 15 | 12 | 4 |
| ⑯ | 0 | 2 | 7 | 9 | 55 | ⑯ | 1 | 13 | 26 | 21 | 9 |
| 合計 | 73 | 215 | 362 | 160 | 378 | 合計 | 206 | 376 | 332 | 143 | 37 |

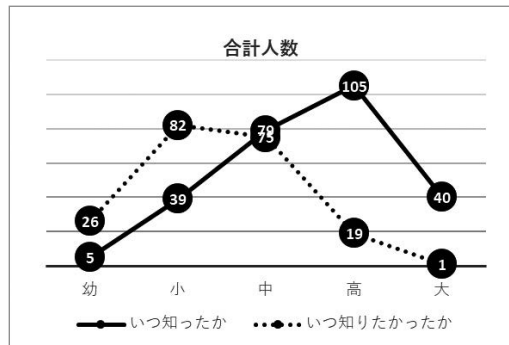
3 結果

①の理由として「暗いだけではつまらないと思った経験がある」「集団生活を始めるときに知っておきたい」などの意見があった。

調査項目②③に関しても「幼児期に知りたかった」という数値に高まりが見えた。その理由として、「好きな色を増やしたかった」「周りにはほとんど純色のクレヨンしかなかった」「自分の好きな色が分かるようになる」などの意見があった。

調査項目⑩⑪⑫は、色の組み合わせによる調和に関する事項で、3項目の結果を合計したものを比較すると次の結果となった(表5)。この結果から「色の組み合わせによる調和」に関しては小学校の時に知りたかったとする数値が中学校、高等学校を上回った。

表5. 色の組み合わせによる調和について「いつ知ったか」「いつ知りたかったか」



【註】

- 1) 「色彩」は「いろどり」として、「色」は「単色」として扱う際に用いることとする。
- 2) 調査対象者：関西福祉大学教育学部で講義「図画工作表現(応用)」を受けた学生74人、調査日：平成30年10月、調査方法：記述式
- 3) 「色ジャンケン」は筆者が考案したもので、「遊びながら色を見る視点を見つけるゲーム」である。「勝ち」「負け」では、色同士の比較に視点を置き、「あいこ」では色同士の共通点を見い出すもの。
- 4) 2)と同様 調査期間：平成30年10月から平成30年11月、調査方法：質問紙による調査